御卒業おめでとう

令和元年度第71回

卒業証書授与式

式次第

1. 開式のことば
2. 国歌
3. 校歌
4. 卒業証書授与
5. 表彰状授与
   1) 日本私立中学高等学校連合会賞
   2) 桃李賞
   3) 皆勤賞
   4) クラブ功労賞
6. 学校長式辞
7. 理事長祝辞
8. 祝辞
   1) 福島県知事
   2) 福島市長
   3) 桃李の会会長
9. 在校生代表送辞
10. 卒業生代表答辞
11. 式歌　仰げば尊し、蛍の光
12. 閉式のことば

福島成蹊高等学校

式　　辞

三寒四温と申しますが、寒さの中にも春の温もりが感じられる本日、令和元年度第71回卒業式を挙行するにあたり、ご来賓、保護者の皆様のご臨席を賜り厚く御礼申し上げます。

ただ今ここに於いて、高等学校普通教育課程を修了しました卒業生諸君３２１名に、卒業証書を授与しました。卒業生諸君、卒業おめでとう。また、今日までご子息ご息女を育てられた保護者の皆様のご労苦に対し、こころからお祝いを申し上げます。おめでとうございました。保護者の皆様には、これまでの本校に対するご理解と物心両面に渡るご協力ご支援に厚く御礼を申し上げます。

卒業生諸君は、間もなく九年が経とうとして居りますが前代未聞の大震災を経験しました。自然災害と、その後の人災がもたらした混乱の中で、他では出来ない学びと貴重な経験をして来ました。自覚出来ないのは無理ならぬ事ではありますが、諸君には幾多の困難を乗り越えて来た力が備わって居ると思います。その証しとして、海外研修の様々な所で生かされたのではないでしょうか。普通コースは台湾で、特進コースはカナダで、一貫コースはベトナムとカンボジアで研修を行いました。これらの国は、新興国・先進国・途上国にカテゴライズされ、置かれている状況が異なります。しかし、同世代交流を通じ懸命に生きる姿から、多くを学び、考えた事でしょう。恐らくは、日本に居ては気づけない衝撃にも出会った筈です。そんな中、相手の心に寄り添う姿勢の所で、震災の実体験を重合わせ、心を通わせ合う事が出来た事でしょう。どうか常に問題を抱えているのは自分だけではない事、そして、相手の立場に立って考える大切さを忘れないで下さい。

また、諸君は、伝統を受け継ぎ、良き市民として生活してくれた事を誇りに思います。特に、挨拶の良さ、エレガントな制服の着こなし、公共での思いやり等、『校訓』の理念を生活態度で示してくれて嬉しかったです。更には、何事にも正攻法で取り組む姿勢は、学習・クラブ、生徒会、ボランティア活動で多くの成果を挙げました。特に、陸上競技クラブ・水泳部・ギタークラブの全国大会常連校としての活躍は、素晴らしく本校の名誉であります。既に進路に於いて努力が実を結

び、決まっている人も居りますが、受験真っ直中の人も少なくはありません。どうか、最後まで全力で戦い抜いて下さい。私は、諸君が必ず志望校に合格すると信じています。

ここで、贐として慣れ親しんだ校訓「桃李不言下自成蹊」の背景に少し触れます。校訓は前漢時代の武将“李廣”の生き様と、分けて語ることは出来ません。“李廣”は、文帝・景帝・武帝の３代の皇帝に使えた、虎をも射抜く弓の名手でした。宿敵、匈奴の“単于”と勇猛果敢に戦い続け、かけがえのない邦を守った武人なのです。敵に恐れられ、反面、篤実さで敬われました。没後、徳を惜しみ、司馬遷が『史記』に残し称えたのです。また、“李廣”が使えた武帝は、西域への拡大を図った皇帝です。その結果、今で言う国際化が加速し、人・情報・物流が著しく行き交う時代が生まれました。ある意味、現在にも通じます。また、いつの時代も人材とは、責任を自覚し全う出来る人の事です。その意味で真に“李廣”は、救世主であり、人材でした。

ところで、諸君に取って次のステージは、どの様に写っているのでしょうか。恐らく、目まぐるしく変化する混沌たる社会に見えるかも知れません。人によっては、一歩踏み出すにも勇気が必要で、しかも、躊躇すら覚える。しかし、怯んでは成りません。そこは諸君の活躍の場であり、夢を叶えるステージでも在ります。今日からは、家庭・学校の庇護下にあった甘さは許されません。どの路に進むにしても、今の自分を乗り越える勇気が必要です。必ず諸君を“桃李のスピリット”が支えてくれます。曰く“自分に厳しく・他を思いやり・真摯に努力する”のです。どうか、“李廣”同様かけがえのないモノを守れる人になって下さい。

結びに、諸君の母校が、次の世紀も繁栄し、名実共に誇れる学校となすべく、尽力することを誓い私の式辞とします。

令和２年３月１日

福島成蹊中学校・高等学校

校長　本　田　哲　朗

祝　　辞

記録的な暖冬と言える今年でありましたが、暦も今日から弥生三月、例年以上に明るい春の光が感じられてなりません。そのような今日の佳き日に、多数のご来賓並びに保護者の皆様のご臨席の下、令和元年度福島成蹊高等学校卒業証書授与式を挙行出来ますことを、高い席からではございますが、本学園理事会、教職員を代表し、心より感謝申し上げます。

福島成蹊高等学校卒業生諸君、晴れてのご卒業誠におめでとうございます。

本日のこの喜びは、君たち自身が高校生活の中で、勉学は勿論、部活動や各種自主活動等に勤しみ、３年間で積み重ねてきた研鑽そして努力が結実したものであり、卒業の栄冠を手にした一人ひとりに対し、敬意を表するものであります。

さて、学校法人福島成蹊学園は、大正２年（１９１３年）に、ここ福島の地に産声をあげて以来、幾多の変遷を経ながらも、校訓「桃李不言下自成蹊」の教えは一切変わることなく、１０６年に及んで歴史を重ねる中に、卒業生２万８千余名（本年度卒業生も含め）を社会に輩出してまいりました。

開学当時、福島県内には５３の私学があったと聞いておりますが、当時あった私学のうち、今に至り存在する私学２校のうちの１校が、この場に臨んでいる卒業生諸君の母校であります。

私は今、卒業生諸君のことを、これまでの長い歴史における全ての卒業生、教職員、そして本学園に関わった皆様とともに「桃李の人」と呼ばせてください。新たに「桃李の人」に加わった諸君は、その自信と誇り、そして気概をもって、次なるステージに歩を進め、果敢に挑戦し続ける人であると信じています。

日本にとっての今年は、「令和」の年号とともに新しい時代の幕開けの年となりました。いよいよ東京２０２０オリンピック・パラリンピックの開催の時を迎えます。今月２６日には、地元福島県「Ｊヴィレッジ」をスタートの地として聖火リレーが開始されるとともに、７月２２日には「福島あづま球場」を会場に実質的な競技が開始されます。私は、１９６４年に開催された日本最初の東京オリンピックをブラウン管モノクロテレビを介してとは言え、小学生として体感し得た一人であります。各種競技において、自分の力の極限を追い求め競い合う選手の姿、そして日本の発展を誇示するかの如き、高度成長期における急激なインフラ整備は、日本の将来に夢と希望を抱かせる刺激的な機会となりました。世界で５都市目となるオリンピック夏季大会が２回以上開催される今回は、日本としての成熟度が試される大会とも言えるのではないでしょうか。

このように期待に満ち溢れる今がある一方、前年度の卒業式の折、同じこの場で、アメリカの科学雑誌が示す「世界終末時計」の針が過去最短の残り２分を指

しているとのお話しをさせていただきました。今年１月に発表のそれは、更に２０秒も短縮され、残り時間１分４０秒を突き付けられてしまいました。大国間の軍拡競争、気候変動への対応の遅れ、さらにサイバースペースにおける偽情報拡散等の懸念拡大に依るとのことです。

時代は激しく動いています。ビッグデータやＡＩなどに代表される第４次産業革命期に入ったと言われますが、これからの新しい時代を切り拓き、激しい変化へ対応する中核となるのは、正に君たち世代であることは間違いないことでしょう。

福島成蹊高等学校愛唱歌「いつか小蹊が」を作詞・作曲いただいたシンガー・ソングライター小椋佳さんは、ご自身の著書の中で次のように言っています。

『「振る舞い」は、現在も行為・行動・仕草等の意味で使われている。古くは、「ふり」と「まい」の合成語と言われる。「ふり」は人間がその成長過程で「真似」で習い覚える行動様式であり、それはそれで人間が社会的動物である以上、社会構成員の相互理解を容易にするコミュニケーションツールとして重要なものではある。一方、「まい」は、ほかでもない個としての「私」を創造的に自己表現する行動を言う。

＜中略＞

近年、時代は大きく変わりつつある。すでに「真似」のみでは、国家としても、個人としても評価されないし、成り立ちもしない状況に立ち至っている。「創造性」とか「独自性」が問われる時代となっている。

＜中略＞

私たちは、この際「ふるまい」のそもそもの意味を思い起こし、古の叡知を感得して、それぞれに自分は本来の意味で「ふるまえているか？」を、自らに問いつつ暮らすことが大切のようである。大変な時代状況であることはたしかだが、思えば人間本来の生き方がようやく始まった時代とも言えそうである。』

「桃李の人」たる諸君こそが、高い「志」の下に「叡知」を追求し、新たな時代において立派に「ふるまう」人たちであることを祈念し、理事会を代表しての祝辞とさせていただきます。

令和２年３月１日

学校法人福島成蹊学園

理事長　高　橋　幸　七

送　　辞

冬の名残がまだ去りやらぬ中に、日一日と温かい春へと近づいてくる兆しが見え始めたこの良き日に、新たな世界へと旅立たれる卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。在校生一同、心よりお祝い申し上げます。

この福島成蹊高校の門をくぐってから今までのかけがえのない様々な思い出が思い返されることだと思います。振り返ってみますと、先輩方は常に私たちの目標であり、憧れでした。先輩方が様々な面で試行錯誤し、努力してこられた姿を、私たちはずっと見てまいりました。

学業においては、目標に向かい、日々の授業や学習合宿を通して粘り強く努力する姿は、とても美しく輝いて見えました。そんな先輩方の姿を見て、私たちも頑張らなければならないと気持ちを引き締めるきっかけを頂きました。部活動では、つらい時には私たちを励まし、勇気づけてくださり、最後まであきらめずにやり続ける意義や、仲間を信じることの大切さを身をもって示して下さいました。

学校行事においては、団結する大切さや協力する楽しさ、最後までやり通す実行力など、数えきれないほど多くのことを教えてくださいました。特に記憶に新しい桃李祭では、全校で団結していた中に、様々な形で各クラスの色が出ており、生徒のみならず外部の方にも楽しんでいただきました。大成功をおさめることができたのは先輩方のお力の賜だと思っております。

今、先輩方の胸の中に思い出される出来事はそれぞれ違いこそあれ、共通していることは、先輩方の記憶に残るだけの時間と労力をそこに注いだという事実です。私たちはいかなることにも全力で、そして笑顔で取りくむ先輩方の姿勢を心に焼き付けています。

これから先輩方は進学、就職などさまざまな道に向かわれます。多くの問題を抱える私たちの国は、厳しい社会情勢の中、どのような道を進んだとしても困難で険しい道が続くことと思います。そのような辛く険しい壁にぶつかった時は、この福島成蹊高校で過ごした日々を思い出してください。「あの時、自分はこんなに努力したんだ。今回だってきっと大丈夫だ。」そう思って前に進んでください。そして、それぞれの場所で自分の輝く場所を築いていってください。ぜひどこかで、「母校は成蹊」と胸を張り、誇りを持って活躍される先輩方にお目にかかりたいと思います。

私たちは先輩方が築き上げられた、伝統ある道を進んでいきます。先輩方の母校、この福島成蹊高校が、先輩方の雄姿にならってますます誇れる母校となるよう、在校生一同、精一杯、努力していくことをお誓いいたします。

最後になりましたが、先輩方のご健康とより一層のご活躍をお祈り申し上げ、送辞といたします。

令和２年３月１日

在校生代表　齋　藤　ちひろ

【送辞委員】

２年１組　中村　　夏
２年２組　齋藤ちひろ
２年４組　廣田　夏楠
２年８組　根本未来帆

答　　辞

桃の蕾がほころぶ今日の佳き日に、私たちは旅立ちの時を迎えます。本日は諸先生方、並びにご来賓の皆様のご臨席のもと、このような盛大な式典を催していただいたことに、卒業生一同厚く御礼申し上げます。ただ今、皆様から心温まるお祝いと激励の言葉をいただき、こんなにも多くの祝福に包まれながら旅立つ幸せをかみしめております。

思い起こせば、入学してからの月日はあっという間でしたが、実りある貴重な三年間でした。成蹊だからこそ学べたこと、経験できたことがたくさんありました。学習面では朝早くから夜遅くまで勉学に励み、鍛錬行事を通して一歩一歩着実に前進する強い精神力と忍耐力を養いました。また、部活動や生徒会活動では、仲間と切磋琢磨しながら同じ目標に向かって頑張ってきました。自主性を重んじるのが成蹊の校風なので、生徒同士でとことん話し合い、納得するまで妥協せずに取り組んできました。そこでは、一つのことをやり遂げるには自分自身の努力ももちろん必要ですが、周囲と協力して取り組むことが大切であるということを学びました。そして、成功した時の喜びは、仲間と分かち合うことで何倍にも大きく膨らむことを実感しました。

その他にも、成蹊高校で過ごした三年間にはいくつもの思い出が残っています。中でも学校全体が一体となり、クラスの団結力が高まった学校行事の数々が印象深いです。個性豊かな色とりどりのクラスTシャツに身を包み、熱い戦いを繰り広げた球技大会や陸上競技大会。練習を重ね美しいハーモニーをホールに響かせた合唱祭。そして創意工夫を凝らしてお客様に楽しんでいただけるような出し物を作り上げた桃李祭。当日を迎えるまでには、意見の食い違いや様々なトラブルの発生により、計画通りに作業が進まないこともありましたが、その苦労ゆえに、完成したときの達成感は何物にも代えがたい思い出となりました。

また、各コースがそれぞれ異なる国へと研修旅行に行くことも成蹊の魅力の一つでした。一貫コースはベトナム・カンボジア、特進コースはカナダ、普通コースは台湾と、日本とは異なる文化を自分の目で見、現地の方々との交流を通して世界の広さを感じ、実際に自分で経験することの大切さを学びました。私たちが

真の国際人として国際理解を深めようとしていく中で、改めて自国の文化や課題に目を向ける機会ともなりました。今年開催される東京オリンピックに先立ち、このような貴重な経験ができたことに感謝しております。

こうして高校三年間の思い出を振り返ってみると、その一つひとつが、これから各々が飛び立つ未来への糧となるものだと強く感じています。そしてここまで成長できたのは、一人ひとりの将来を真剣に考え導いてくださった先生方と、一番近くにいて見守り、励まし、いつも味方になってくれた家族の存在があったからだと思っています。十八年間、大切に育ててくださって本当にありがとうございます。在校生の皆さん。これからは皆さんが成蹊の伝統を受け継ぎ新たな歴史を築いてゆく番です。私たち卒業生は皆さんの活躍を心から応援しています。

さて、本日をもって私たちの高校生活に幕が下ります。平成から令和という新しい時代となり、私たちが進んでゆく未来はこれからどんどん変わっていくことでしょう。そのような中でも、ここで学んだあらゆることを財産にして、世界に羽ばたき活躍できる人間になれるよう努力を続けてまいります。

最後になりましたが、これまで私たちを支えてくださった全ての方々に御礼申し上げると共に、私たちの母校福島成蹊高等学校がますます発展され、満開の桃李の花が咲き誇ることをお祈り申し上げ、答辞といたします。

令和２年３月１日

卒業生代表　石　川　柚　奈

【答辞委員】

３年１組　邉見　　萌
３年２組　渡邊　沙絵
３年８組　石川　柚奈

祝　　辞

本日ここに、晴れて卒業式を迎えられた皆さん、御卒業おめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

また、今日の晴れの日まで、子どもたちに限りない愛情を注ぎ育んでこられた御家族の皆さん、建学の精神に基づき情熱をもって教え導いてこられた教職員の皆さん、さらには温かい御支援と御協力を賜りました地域の方々に対しまして、深く敬意と感謝の意を表します。

東日本大震災から間もなく１０年を迎えようとしております。

避難地域の復興・再生、風評・風化、そして、急激に進む人口減少問題など、本県はいまだ様々な課題を抱えています。さらには昨年の台風１９号等によって甚大な被害を受け、二重、三重の困難の中にありますが、復興・再生の歩みを進めていかなければなりません。

このような中、学業面での成果はもとより、芸術・文化やスポーツなどでの活躍は、県民に勇気と希望を与えてくれました。また、台風による被害の際には、県内各地で高校生が自主的に立ち上がり、住宅の泥のかき出し作業などに懸命に取り組む姿は、被災された方々を元気付けるとともに、大きな手助けとなりましたことは、大変心強く、誇らしく感じました。こうした行動は、福島の新たな力、強いきずなの象徴となっています。

高等学校卒業という人生の大きな節目を迎え、皆さんの胸中には卒業の喜びとともに、在学中の様々な情景が思い浮かんでいることと思います。これまでの学校生活の中で培った幅広い教養とかけがえのない友人とのきずなは、生涯の財産となるはずです。今後は自らが選んだ道に向かって力強い一歩を踏み出し、それぞれの道で個性や能力を存分に発揮することを期待いたします。

今年はいよいよ東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。メダリストへ授与されるビクトリーブーケに採用された本県産のトルコギキョウの花ことばは「希望」、そして「感謝」です。この言葉は、本日門出の日を迎えた皆さんにとってもふさわしい言葉であると確信しております。

素晴らしいふるさとを、更に希望と笑顔に満ちあふれる「新生ふくしま」にするためには、皆さんのような若い力が必要です。「希望」と「感謝」の思いを胸に、どんな困難にも勇気を持って果敢にチャレンジし、新たな未来を共に創り出していきましょう。

結びに、皆さんの前途に幸多からんことをお祈りし、新しい旅立ちに当たってのお祝いの言葉といたします。

令和２年３月１日

福島県知事　内　堀　雅　雄

祝　　辞

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

本日、めでたく卒業証書を手にされた皆さんは、それぞれに将来への夢を抱き、喜びと充実感で胸がいっぱいのことでしょう。

また、皆さんの健やかな成長をあたたかく見守り、今日の日を心待ちにしてこられたご家族の皆様、そしてこれまで熱心にご指導くださいました校長先生はじめ先生方も、感慨一入のことと思います。心よりお祝いを申し上げます。

皆さんは、入学からこれまで、この学び舎で勉学や文化・スポーツ活動、そして奉仕活動などに打ち込んでこられたことと思います。高校生活の中で心に刻まれたたくさんの思い出と、喜びや悲しみを分かち合った多くの仲間との友情は、一生の財産になることでしょう。

いよいよ明日からは、進学や就職など、皆さんそれぞれが志す道への第一歩を踏み出すことになります。そして、その道の途中で様々な困難や試練にぶつかることもあるでしょう。しかし、どんな時も自分の夢や目標を見失わず、強い意志を持ち、挫けることなく積極果敢にチャレンジをしてください。

まもなく、東日本大震災・原発事故後、１０年目に入ります。未だ復興は「道半ば」ですが、この３月にはオリンピックの聖火が福島市を巡り、本市唯一の名誉市民である古関裕而氏ご夫妻をモデルとした朝ドラ「エール」の放送も始まります。７月には県営あづま球場から東京２０２０オリンピック・パラリンピックの幕が開きます。国内外から多くの人々が集まり、福島から情報が発信できる今こそ、福島市が大きく飛躍する千載一遇のチャンスです。

福島市の未来を担う若い皆さん。心から住んで良かった、そして、誇りをもって住み続けたいまち、世界の人たちにエールを送れるまちへ、「ワンチーム」で前進していきましょう。

結びに、皆さんには、今日まで皆さんの成長を支えてくださった方々への感謝の気持ちを忘れずに、生まれ育ったこの「ふるさと福島」に自信と誇りを持ち、一人ひとりが新しい福島づくりの主役として力強く歩んで行かれることをご期待申し上げ、お祝いの言葉といたします。

令和２年３月１日

福島市長　木　幡　　浩

校歌

わが学び舎の
　名もゆかし
桃李の花の
　匂へれば
ものいはねども
　暮ひくる
かげやこみちと
　なりぬべき

金剛石の
　みさとしに
阿武隈川の
　よどみなく
進みゆく世に
　遅れじと
いそしむ技の
　楽しさよ

仰げば尊し

一、仰げば尊し　わが師の恩
教えの庭にも　はやいくとせ
おもえばいととし　このとし月
今こそわかれめ　いざさらば

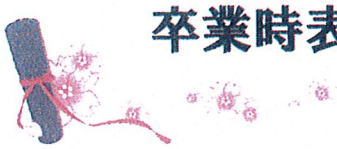
二、たがいにむつみし　日ごろの恩
わかるるのちにも　やよわするな
身をたて名をあげ　やよはげめよ
今こそわかれめ　いざさらば

三、朝夕なれにし　学びの窓
ほたるのともし火　つむ白雪
わするるまぞなき　ゆくとし月
今こそわかれめ　いざさらば

蛍の光

一、蛍の光　まどの雪
ふみ読む月日　かさねつつ
いつしか歳も　すぎのとを
明けてぞけさは　別れゆく

二、とまるもゆくも　かぎりとて
かたみにおもう　ちよろずの
心のはしを　ひとことに
さきくとばかり　うとうなり



卒業時表彰者一覧

日本私立中学校高等学校連合会長賞　1組　佐々木　暸

桃李賞　代表　3組　柴山　千紘

一貫文系コース　1組　菅野　愉香

一貫理系コース　1組　佐藤　那奈

特別進学文系コース　2組　浦山　夏梨

特別進学理系コース　2組　原田　芽海

普通文理国公立コース文系　3組　柴山　千紘

普通文理国公立コース理系　4組　菅野　美空

普通文系コース　7組　村田　柚那

普通理系コース　9組　但野　智哉

普通普通コース　10組　齋藤　遥大

クラブ功労賞　代表　9組　庄司　祐大

ギタークラブ	3組	遠藤　晴	
	4組	深谷　あい	
	5組	佐藤　咲良	半沢　比菜乃
	6組	齋藤　佳那	澤木　海羽
	7組	一條　壮平	
	8組	石川　柚奈	大内　悠愛
		林　直希	安田　拓実
		山田　俊介	
	9組	庄司　祐大	樅山　真依
陸上競技クラブ	6組	渡邊　陽菜	
	10組	熊田　統弥	三本木　良坤
水泳クラブ	4組	須田　俊	
	9組	泉田　龍ノ介	但野　智哉
	10組	安齋　叶空	五十嵐　蓮
		吉田　朱佑	

皆勤賞　92名　代表　6組　一條　花乃

1組	石川　智章	3組	宇野　陸人	5組	朝倉　花生子	7組	阿部　由莉加	9組	梅津　陽介
	鹿山　萌		加藤　駿弥		大勝　佑介		板倉　はづき		遠藤　隆世
	佐々木　暸		亀岡　昂生		菊地　和起		大石　有紗		小原　朋恵
	佐藤　那奈		菅野　美羽		佐藤　美聖		片平　凌輔		菅野　慶
	菅野　愉香		佐藤　菜南		成田　匠		佐藤　敬太		菊田　蒼大
	鈴木　恒大		鈴木　里佳		林　茉弥		高木　心愛		庄司　祐大
	高塚　真里奈		三浦　礼		八巻　貴都		武川　令旺		進藤　千聖
	高橋　慧悟		吉永　有希		吉田　弥		村田　柚那		鈴木　美乃里
	西村　帆貴	4組	五十嵐　未羽		渡辺　くらら	8組	石川　柚奈		三品　重晴
	古山　絵理奈		河原　昂太	6組	一條　花乃		大内　悠愛		樅山　真依
	邊見　萌		菅野　美空		一條　真未		河野　立道		藪内　彩乃
	武川　秀辰		国分　歩優美		岩見　浩香		小畠　美桜	10組	門脇　翠
	山崎　陽香		佐藤　敬太		小野　菜々美		齋藤　和		篠木　里奈
2組	浦山　夏梨		鳴原　佑太		佐藤　悠貴也		佐藤　里奈		安田　未来
	菅野　航弥		白井　優衣		武田　佳菜子		滝田　真央		
	菊田　大亮		中澤　蒼唯		中野　歩奈				
	佐藤　大空		深谷　あい		半澤　愛葵				
	原田　芽海		三浦　康利		藤井　伶音				
	飛弾　香乃		村上　一輝		宮島　杏奈				
	山元　章詠		村山　佑哉		山田　優介				
	渡邊　沙絵		吉田　理恵						
			渡邊　哲						

お願い

文部科学省からの学校における新型コロナウィルスに関連した感染症対策の連絡を受け，本日は表彰者の呼名を行わず，表彰者一覧の配布に代えさせていただきます。
ご理解いただくとともに，個人情報（本用紙）の取扱いについては十分な注意をしていただきますようお願い申し上げます。